

昔話についての手控え数件

——西行話・たとへづくし・その他——

太 田 東 雄

一 「西行話」について

昨五十五年に地元の山陽新聞から刊行された『岡山県大百科事典』の口承文芸部門で、私は「西行話」の項目を担当したが、事典としての制約から摘記にとどまっていた。誌面を頂いたのを幸いに、その折りに利用した資料も示し、やや詳しく補説させて頂く。一段下げて字を小さくしたが、その旧記事の一節である。

西行話 さいぎょうばなし 歌人西行法師を主人公とする一種の狂歌謡。^{ばなし}『日本昔話集成』に登載されている二型のうち、岡山県では「西行と女」の類が採集された。旅の途中の西行が野蕨ももぢをみると、たまたま萩の上だったので枝がはねたのをへ西行はいくたの旅をしてみたが、萩のはね蕨これぞ見はじめ」と歌う「萩のはね蕨」は古川柳にも詠まれていて、かなり流行した話であつたらしい。

『日本昔話集成』（あと「集成」と略称する）の後身の『日本昔話大成』によると、本話型が^{（注）}南から宮崎・福岡・愛媛・香川・山口・広島・島根・鳥取・和歌山・兵庫・京都・滋賀・岐阜・福井・新潟・神奈川・群馬・山形（最近の報告によると長野・宮城も加わった）の各府県にまたがっていることが知れる。

まず「萩のはね蕨」の話柄について岡山県での事例を紹介する。

「（原題・西行のはぎのはね蕨）」

苫田郡阿波村大畑湯谷・女

西行さんが旅ゆうしられる時になあ、うね越しでしょうなあ、お便所へ行きとうなつて、せえで行かれる時に、どうもどこへ行こうなあけえ、せえで野にしられたんでしょう。その時にはぎを踏んどられたのが、立てられるおりに

はねて、せえで、「西行もいくらの旅もしたけれど、はぎのはね糞これぞ見始め」言うて通られた。(阿波 288)「

『日本昔話通観』(同朋舎)第十九卷 293 から引用した。なお、類話にある歌はいずれも下の句共通で、

・西行はいかなる旅もしてみたが……

(勝田郡奈義町)

・西行はいくたの旅もしてみたが……

(苫田郡阿波村大高下)

である。川柳との関連で当話型が論じられたとは管見にないので記事にしたのであるが、たとえば『日本史伝川柳狂句』(近年、古典文庫で復刻)に、

「A、萩で跳ね 『西行はいかなる旅もして見たが萩のはねくそ今が見初め』旅にて萩の枝を踏み、其上に用を足したるところ、了れて退けば枝が跳ねて、因って此吟ありと、

西行は名高ひ尿を一度たれ 四三・二四ウ

古今の尻に名の高い尿の哥 一五一・一四ウ

萩の尿集の中へハはねこまず 一一八・八オ

此所西行無用萩の菴 八四・二二ウ

……萩の寺 一四〇・二ウ

萩寺へ来て西行の物語 六一・一〇オ

夏枯の草に西行首をたれ 弘二・佃二七ウ」

とある。(注2)

(古典文庫第三六四冊 223~228)

短詩型であることの制約からして、川柳の句柄には世上既知の話題を要約してはめこんで、言葉の捻りを加えて提供するという例が多いので、この各句もその類と見れば、昔話「萩のはね糞」あるいはその原意の話柄の流通した時期が近くともこの句群の年次以前(注3)文化四年以前)に溯る、と判断してよからう。

またそれが亀(あるいは蟹)の上だったので、動きだした亀を見て「西行もいくらの旅もしてみたに糞のほうたはこれぞ見はじめ」と歌い、亀が歌い返す「西行と亀」。この話柄は下(しも)がかった話なので(へとりの話(最後の話))とされ、さらに続けて他の話をしないこともある。

これも岡山県での事例について見ることにする。

(「原題・弘法大師と亀」)

阿哲郡哲西町川南・女

昔、あるところを、弘法大師さんが通りようちやったんじやそうな。そうしたら、便所をもよおして、道の下あ降りて、まあ用事ゆうすまあて、逃げちゃったんじやそうな。逃げてから後へ向いて見りやあ、おんごり、おんごり歩きようるげな。まあ、こんなあえらいことじやの思うて、「長年、長年旅ゆうするけれど、生糞ひったはこれ始め」

いうて、弘法さんが歌あ詠んじやったというて。そうしたら下の方で、「長年道下に住むけど、駄賃取らずの重荷負いをしたのは、これ始め」いうて、詠み返やあたいうて。へえから、なんじやろうかと思うて、ようかごんで見たら、亀じやったいうて、それから糞臭うなったんじやと、亀が昔こふり。(中国山地 P. 375)

注① この話は「とり(最後)の話」といい、これでその話はしまいとする。下の話(色話も含まれる)をすると、話が終わったということになる。② 文中には「弘法大師」とあるが語型名は他に合わせて「西行話」とする。」

前項と同じく『日本昔話通観』P. 634 から引用した。この(1)の注記に関しては、当該書の編集代表たる稲田浩二氏の(注5)論説がある。

風流な萩に比べて、亀の話題では江戸人士の嗜好に合わなかったか、対応句は見当らぬようである。歌での応酬という重い形式を措いて考えるなら、「萩のはね糞」あるいは伝説の「西行石」あたりから派生したものであろうか、とも思う。

洗濯女に歌いかける文字通りの「西行と女」も一例採集されている。なお『昔話集成』に登載された(仮の宿を惜しむ君かな)と歌う話は『遠集抄』・謡曲「江口」で流布したものであ

り、各種の俗曲にも歌われている。

「俗曲」としたのは、長唄・河東節・木やり歌の類である。西行が「川にいろ」女に歌いかける「西行と女」の例話を次に示す。

「西行法師の歌(後半)」

せえから、また、むこうへ、むこうへ行きようたら、娘とやら嫁さんとやらが、洗濯うしうて、その尻う出いてしうたで、その坊さんが通りようる思うて、杓の敷の抜けたのを、ぱっと尻伏せたんじやそうな。そうしたところ、尻が見えたんじや。

西行もいくらの旅もしてみたに、^(女陰の蒸し湯)ほほのこしきは、これぞ見初め、いうて、歌あうとうた。語り手・勝田郡勝田町赤坂 宇野いち」

『美作の昔話』(日本放送出版協会刊)P. 128から引いた。

この話柄から想起するのは(伝説的な付随部分も多い西行については別として、俳聖の雅懷を下世話に扱うと叱責ものであろうが)『野ざらし紀行』中の

「西行谷のふもとに流あり。をんななどの芋あらふをみるに、

いもあらふ女西行ならば歌よまん(大系本)」である。遊女江口との摂州での歌の贈答と結んだ解釈が定説のようであるが、前記したような昔話群の、それより数等微当な

祖型的な狂歌話は句吟当時流布していなかっただろうか、と俳句については門外漢である私は夢想する。例えば、島

「（原題・西行の歌くらべ、梗概）の部分

根^ニ西^ノ行^ノが谷川で葉を洗っている十二、三歳の娘が自分をじつと見ているのに気づき、「十二や三の小娘が、恋路の道を知ることとはなるまい」と詠むと、娘は「おおそれや谷あいのつつじ椿を御覧ない、せいは小さいが花は咲きます」と詠み返す。（中略）こうして西行はいたるところで歌に負けたという。（匹見P.229）

島根県美濃郡匹見町下道川・男（『日本昔話通観』第十八卷P.35）」

のような。また「富士見西行」の話題は、当時どうであったか、と同じく『野ざらし紀行』の富士の句を見て興味を持つ。

昔話から照射した西行は、至極、親しめる人柄である。

西行についての庶民の感想は例えば、

「唄に上手じゃ小唄に上手／むかし西行の後裔^{なごれ}かや

むかし西行のながれじやないか／むかし西行の宿をした

（庭歌―員弁・菰野）

富士の裾ので西行さんがひるね／なにを枕に／田古の浦

（庭歌―度会・鶴倉）

『三^{（注7）}重^{（注7）}県民謡集 労作唄』（三重県民謡研究所刊）

P.おおよびP.81

という歌に示されているようなものであったろう。

以上で岡山県に見られる「西行話」（その一半である「西行と女」の諸形の紹介を了えたが、念のため、「江口」の話題をとり入れた昔話を紹介しておく。集成では同じく「西行と女」に収合されてある。

「（五二八 西行と女）

岐阜県 ○大野郡——西行^{（注6）}が汚いなりで門口に立つて雨宿をこう。女が早く行けというので「世の中をいとうまでこそかたからめ飯の宿を惜しむ君かな」と詠むと、女は笑顔になって泊める。（丹生川・一二六番）

『日本昔話大成』第九卷P.282」

また、この例話と並べてある、西行が鼓ヶ岳に登って、「名も高き鼓ヶ岳に来てみれば西も東もたんぼの花」とまず詠み、他人からの示唆を受けて初句の「名も高き」を鼓と呼ぶする「音に聞く」に、三句の「来てみれば」を「うち見れば」に修整する語柄は近世にもてはやされたものらしく、これも川柳に数多く詠まれている。

以上、かなりくどくど並べた各語柄をどのように整理し、話型と認定するか、何種類の分類案を用意するか、についての意見はここではさし控えておく。

注1 稲田浩二氏より、主人公は西行であると名は挙げないが、類する話が沖繩にも多く、現地では演劇によって流布したもののようであるとの御指摘を頂いた。

注2 各句の下の記号は「四三・二四ウ」とあれば、「俳風柳多留四十三篇二十四丁裏」、「弘二・佃」は

「弘化二年佃評万句合」の表示である。

注3 『柳多留』四十三篇は序文によると、文化四年春に開催された二代川柳の住居新築祝賀の句会での入選句が掲載されていることになっている。

なお、篇中二十二丁表に

はねる子を海老にして乳母犬をよび

の句があった。昔話「犬舞入」と関連する習慣を示した句である。「海老にして」とは抱えて、これから用便させるのである。犬はその始末をするのであろう。

注4 一休と西行と弘法大師、太子と大師、伝教大師と弘法大師、それぞれの間で時に話柄の重複が見られる。

またこのような話柄には、無名の人を主人公にしようとする傾向（昔話的ともいおうか）と、逆に、より著名な人に仮託されようとする傾向とが見られる。

注5 「『とりの話』小考」伝承文学研究第十一号

注6 『続丹生川昔話集』を典故として同地の殆んど同形態の話が『日本昔話通観』第十三巻の「狂歌の手柄」

の項へ類話として載っている。旅をして来た西行と長者との応待になっている。

注7 「雉も鳴かねば うたれもすまい 父は流の人柱」
（南牟婁・南輪内）の歌も載っている↓二参照

二 『たとへづくし』から

一昨五十四年十一月に活字化刊行された松葉軒東井編・宗政五十緒校『たとへづくし』（同朋舎）は「天明六年成立の江戸期のことわざ・慣用句大辞典」であるが、昔話に關する慣用句も豊富に含んでいて、有難い出版物である。既にいくつかの話題が紹介されているらしいが、ここに口承文芸との関連上重要と思える詞章を恣意に選んで抽出しておく。

へ へ内は引用であり、上の数字は活字本の頁を示す。便宜上、小字部分を（ ）内にまわした。引用の部分省略をし、特にふり仮名はかなり省略した。

その外にあるのは私注であるが、昔話の話型名については仮りに『日本昔話事典』（弘文堂）の項目名を利用し、『』で示した。「」は『日本昔話通観』の題名を利用したものである。

※へ一把の蘆を十六把になす人を婿に取らんといふ大百姓

あり 或人往てまづ這入て庭あり向に歛ありお婆の顔に
歛あり（以上合十六把）＜『一把の藁十六把』

48＜袴着て小用が出来まひ（唄の答）そんなら小用仕ながら足袋の紐が成か）小咄

49・52＜咄しは庚申の晩＞

75＜喃の声さへ聞かずば浮世は儘よ（カツタリコ。カツタリ

リ）＜カツタリコ）米舂一村（サテハ鼠の隠里ト知

猫ノ真似スレハタチマチキエウセヌト云云＞『鼠浄土』

79・82＜蜀魂は迷途の鳥（夏中千声鳴ト云リ）＞

85＜時鳥は本尊掛たか（ト云）忍音は初音（ヲ云）……＞

86＜ほととぎすは夏中に八千八声鳴といへり千声ともいふ

（然トモ昔モ今モ聞人希也）＜以上三項『時鳥と兄弟』

ほか

89＜転失気尻窄める＞落語

92＜虎狼より漏るぞ懼ろし＞『古屋の漏り』

153＜枯たる木にも花咲く＞『花咲爺』？

170＜蛙の哥よむこと 住吉の浦のみるめも忘れねば飯にも

人に又問れけり（女ニ化シ契尋行シニ蛙ノ足趾如此）＜

『蛙女房』

180＜慾引張れば股劈ける＞

180＜慾の角鷹＞以上二項『鷓鴣は鳥の王』

197＜団子ほど賑た＞『団子舞』？

201＜狸の鞆丸八疊敷ひろがる＞『狸の八疊敷』

207＜大太坊（だいたう）だいた法師ト云＞（日向塩田ノ大夫ノ女大

蛇ト接シテ男子ヲ産 大太童ト云鞍童トモ云……）＜

『蛇と女』

209＜鰯木に上る藤の棚＞『芸くらべ』

214＜曾呂利咄しにこまる（……轡師ナリ）＞

223＜壺じゃ（從ニ堺ノ宿院）出ル語也或人壺ヲ一ツ買ヒ

代錢百穴渡ス……＞落語『壺算』

231＜鼠の婿の談合にて＞『鼠の嫁入り』？

259＜馬の望欲れたるは其女の内衣を弛さし直に馬の頭を

可レ獲＞馬娘婚姻譚？鏡花『高野聖』を想起

262＜無腹国に米沢彦八渡らば国人等大に迷惑せん抱へる

腹無故＞小咄・落語

273＜魚も喰はれて成仏す＞一休咄

359＜鼻の帝に晴雨の示あり（乃利須利於介ト鳴ハ晴天

乃利止里於介ト鳴ハ雨）＞『鼻紺屋』

380＜五人面々理屈という咄あり 客四人儲く床の一軸絵

讃あり評じていはく一ニ賛といふあり 二ニこれは詩な

りと……亭主出て 是元質のながれもの＞小咄

428＜座頭餅屋にて銭払ふ三人一人宛いへるは此家は三ツ

食ふた 又一人曰四ツ食ふた 又一人曰五ツ食ふたもの

ぞと＞『座頭振舞』見つくるった・ようつくるった・何

日つくろった

508・509へ言はじ父は長柄の人柱雉も鳴ずは打たれまじも
のを『長柄の人柱』

510へ蕨荷を喰へば物忘れを為(是草天竺藥持之塚より生
ず故ニ鈍草ト名く)『茗荷女房』

524へ味噌豆は三里廻りても喰ふべし『継子の釜茹で』

530へ蚯蚓仏に問 土喰尽後以何可食 仏答曰六月土
用に日に曝れ可死(云云)『蚯蚓と土』

538へ娑婆で見た弥次郎かとも思はぬ』小咄

545へ芝講とて宮境内寺院境内にて小屋の講談下なり

550へ須弥山を飯にし大海を汁とし虚空を呑めど喉に遮ら
ず(一休和尚)大話

552へ四枚の鱗でよかれがしと思ふ『祝い直し』

556へ百物語は不為もの必怪みを招く

568へ雀は親に孝行鳥親の死際に養着ながら行て遇ひしと
燕は女にてお鉄漿付身嗜し得不遇といへり『雀孝行』

571へ昔先箇様猿の尻は真赤な(昔咄ノ結語也)

580へ猿の尻は真赤な(昔咄の結句)

『日本古典文学全集』月報38に稲田氏の「『昔はまつかう』周辺」の論が掲載されている。氏は御伽草子『福富長者物語』の結句「昔はまつかう」に着目され、以降の文献

から「傾城八花形」の「昔まつかうさる人の書き伝へたる物語」に到る「まつかう」の用例を渉獵されている。そして現代の口承昔話の「昔まつかう」系の結語の諸例を示され、中でも「昔まっこ猿まっこ、猿のお尻はまっ赤いしょ」等の下の話題へ向かっていく傾向と、お開きの合図である「とりの話」との関連をも述べられた。

ところで、それにこの「たとへづくし」の二項目を加えて考えると、稲田氏の推論の二時代を結ぶ中継点に相当するものとして扱えそうである。(「先箇様」と当時の意味理解も示されている)。さらに『俚言集覧』に紹介されている「猿の尻は真赤な牛房焼ておっつけろ」の詞章を加えてみる。そして「傾城八花形」の用例の力点を振ってみる。そうすると、語呂合わせの興も働いたとして、

福富草子「昔はまつかう」

傾城八花形「昔まつかうさる人の…」

童謡「猿の尻は真赤な…」

(あるいは) たとへづくし「猿の尻は真赤な」

たとへづくし「昔まつかう猿の尻は真赤な」

現行「昔まっこ猿まっこ、猿のお尻はまっ赤いしょ」等

という系統図が組み立てられそうである。童謡あるいは……としたのは、童謡から昔話への流れがあったとも、その逆であったとも考えられるからである。「とりの話」小考」に挙げられた結句「どんびん三助猿まなこ、猿のけつさごぼう焼いてぶつつける」(山形県北村山郡)は、前記童謡との関連の強い事例であろう。

× × ×
㊦㊦(へお尻咄しが出れば咄の仕舞じゃげなゝ
㊦㊦(へ下子の啼は卑賤の事にて果る)

「とりの話」との関連に注意したい。(注2)以前にも書いたことであるが、咄本『鹿子餅』(明和九年)の巻末に「下司咄屎果以古語」先此巻是切」とある。

㊦㊦(へげなと言へばげるの神様叱らしやるげなゝ「げなげな話は……」の類であろうか。

注1 この詞章は見出しになっていて、以下「尤の草子」等の類似詞章の引用がある。「尤の草紙」には「京わらはべの小うたなり」とある。

注2 「昔話の周辺」国語通信一六六号

三 その他

。五月、中国の学者に会って、昔話「宝化物」中の化物の

衣服の色と宝(金銭)の種類について、『霊怪録』『稽神録』にある記事に着目したと話すと、「『酉陽雜俎』も見るとよい」と示唆された。折りよく日本では訳本が刊行されつつある。

。その後、林圀女史編の『菫仙売雷』の訳書『雷売りの菫仙人』(創元社)を読んでいると、「人の運命」という題の話で「宝化物」そっくりのエピソードにぶつかった。

。雑誌「」四十九年九月号に花咲一男氏が紹介された式亭三馬の合巻『力競稚敵討』には、昔話「獅子と鳥」の趣向がとり入れてあった。

。版本「あつめ草」をくっていると、心学の本であるが、昔話「打出の小槌」……例の米倉が絵入りで載っていて、「打出した子免くらよりはおとりけり 欲に眼の見へぬおやじハ」と歌が添えてあった。

。昔話と直接の関係はないが、よく話題になる枕草子の「冬の月」が(師走の月と老女の化粧とは冷まじきものと(清少納言枕草紙)として「たとへづくし」P.516に記載されている。

× × ×

管見の狭いままで書き記したので諸先学の論考に就いて参看することも少く、妄説に過ぎぬかとの不安を抱いている。特に芭蕉の句についての感想は独断そのものであるう

し、また、『たとへづくし』の各項については、続巻を十分に参照できぬ恕卒の指摘であり、既に論じられたであろう項目も確かめぬままでの記述であることをお詫びし、ご批評を仰ぐことにさせて頂く。

(八十一年十月三十一日記)

(市立岡山商業高校勤務・『日

本昔話通観』編集委員)

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅶ

日本文学ノート 第十四号、第十五号、第十六号(宮城学院女子大学)

日本文学論集 第三号(大東文化大学大学院)

日本文学論稿 第十号(東北大学文芸談話会)

日本文芸学 第十五号、第十六号、第十七号(日本文芸学会)

日本文芸研究 第三十二巻第三号、第三十三巻第三号(関西学院)

ノートルダム清心女子大学紀要 第五巻第一号

俳句文学館紀要 第一号(俳人協会)

梅光女学院大学文学部紀要 16

花園大学研究紀要 第十一号

花園大学国文学論究 第九号

藤女子大学国文学雑誌 28

富士論叢 第二十六巻第一号(富士短期大学)

文学研究科論集 第八号(国学院大学大学院)

文学研究稿 第三号(文学研究稿の会)

文学史研英 21・22(大阪市立大学)

文学論輯 第二十七号(九州大学)

文学論叢 第六十五輯(愛知大学)

文学論叢 第五十五号(東洋大学)

文学研究 第九十四集、第九十五集、第九十六集、第九十七集、第九十八集(日本文芸研究会)

文学と思想 第四十五号(福岡女子大学)

文学と批評 第五巻第四号、第五号、第六号(文学と批評

の会)

文学論叢 第十五号(大谷大学)

文献探究 7・8(九州大学文献探究の会)

文研論集 第七号(専修大学大学院)

文莫 第六号(鈴木服学会)

文林 第十五号(松蔭女子学院大学)

方言研究年報 続六(広島方言研究所)

武庫川国文 第十八号(武庫川女子大学)

百舌鳥国文 第一号(大阪女子大学大学院)